

## 雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

## 童話と童謡

童話を聞(聴)いたり読んだりしたことがない、あるいは童謡を聞いたことがない、と言う人は少ないであろう。大抵の人は1つや2つは覚えているに違いない。

童話や童謡は子供が親しみ易いように作られている読み物なのである。読むには声を出すこともあるし、出さないこともある。一定の節をつけて読むのが童謡で、歌と言っている。言葉は大抵文語的で詩の形をとっている。

童話や童謡は、子供が読み、歌うものであると言われれば、端的にはその通りである。しかし、もっと深い意味があるように思う。童話や童謡は子供が作るのではない。大人が作るのである。それを子供に伝えるのも大人である。作家は子供の純真な心を育むにふさわしい話や歌を作ろうと努め、発表する。しかし発表しても直ぐに子供に伝わる訳ではない。先ず大人が読み、歌ってみて、子供に聞かせたいものかどうかを評価し、良い評価のものは子供に話し、歌って聞かせる。こうして童話や童謡は子供に伝わる。子供は気に入った童話を覚え、童謡を自ら口ずさむようになる。大人が読んで歌って、自から童心を募るような童話や童謡は、子供に聞かせると子供の心に焼きつく。そこには、ただ面白いだけでなく、善と悪、徳と不徳、幸と不幸など、世の中の光と陰が見えない姿で綴られていて、通して教訓となって、社会の規範が知らないうちに子供の心に植え付けられる。それは生涯忘れることはない。これこそ教育の真髄と言える。

私が懇意にして頂いた童謡作曲家N氏(故人、1902年生まれ)は、童謡の曲を作る際「大人が子供に歌ってきかせる歌。又大人が童心を募って自ら歌ひ楽しむ歌。」を意図しているという。正に言い得ている。子供が歌うことを直接の目的に置かず、先ずは大人が歌うために作るという意味であろう。このことは、子供が歌ってはいけない、という意味ではない。子供が大人から聞き知って、自ら自然に口ずさむのであれば、作者にとっては望外の喜びであろう。

日本にはかつて、童話や童謡の創作が盛んな時代があった。大正中期から昭和初期にかけてだが、当時は富国強兵が国家目標であり、子供の教育でも軍人や兵士を讃え、愛国心を育てることが重要であった。このことは当時の教科書にも反映している。当時の識者はそのような世相を憂い、文芸や音楽を通じて子供の純性を保とうと、雑誌を通じて童話・童謡を広く世に表した。代表的な雑誌に「赤い鳥」がある。十数年続いたが、昭和の戦争の時代に入って廃刊となった。

世に文学作品はあまたあり、一度読んで記憶に残るもの、残らないもの、様々あるが、多読者は読んだ全てを覚えているわけではない。ただ一時の時間つぶしに読むようでは記憶に残らない。読者が受けた感銘が、生涯忘れられないものであれば、その作品はその人にとっての名作になる。名作は時を経てまた読みたくなり、読めば感慨が一層深まる。子供の頃に知って生涯頭に残るような童話や童謡は、最高の名作といえる。ただし作品への評価と作者への評価は必ずしも同じではない。また作者の明・不明は作品の評価とは関係ない。

人の感性は個人ごとに異なる。文芸も音楽も、それに対する美意識は個人ごとに異なる。ある人が最高と評価する作品も、別の人には何の関心もないかも知れない。賞などの組織評価を得た作品も、一般各人の評価はまちまちであってよい。

童話や童謡は大人が読み歌い、童心を募って楽しむものとは、味わうべき言い方だと思う。大人の中でも特に高齢者にとっては一層当てはまりそうな気がする。私も声は出さずに、好きな童話や童謡を読み歌い、心に安らぎを覚えることがある。